

(日置郡金峰町大字白川字中白樫野)

位置と環境

本遺跡は、町の中心地から東側の山間部へ約3kmのところであり、標高約100mの台地上の山裾に所在している。北側に小高い山を望み、東側には万之瀬川の支流長谷川が流れ谷を形成するもので、同じ台地上から旧石器時代や古墳時代の遺物が発見されている。

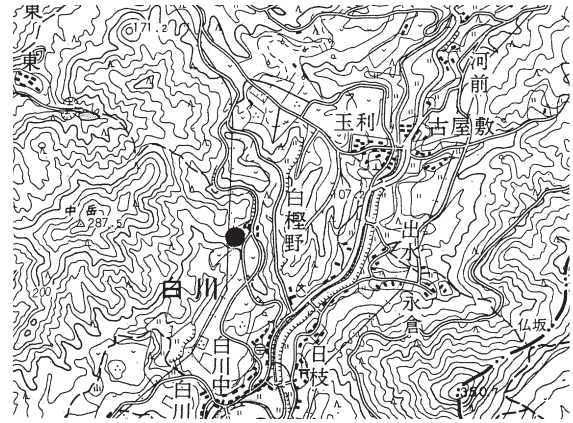
調査の経緯

遺跡は、畑仕事を行っていた耕作者が偶然、蔵骨器を発見したもので、通報を受けた金峰町教育委員会が平成11年に発掘調査を実施した。調査は、蔵骨器が発見された周囲のみに限定し、火葬墓の構造を明らかにすることを目的として行った。

遺構と遺物

調査の結果、耕作土の下から100×70cmの長方形を呈する墓壇が確認された。墓壇は、幅30cm前後の7つの石を周囲にうまく組み合わせ、床面に小石を敷きつめた状態で発見された。遺構の痕跡から、本来は8つの石で構成されていたようで、短軸方向に南北、長軸方向に東西を意識して構築されていたことが判明し、北側の小高い山に真北の軸をとっていた。東西南北の方位を意識した構造は、従来、中国の陰陽思想が反映されていたと指摘されており、本遺跡も遠からずその影響を受けていたものと考えられる。

遺物は、墓壇内から土師器短頸壺を本体とする蔵骨器とこれに伴う土師器の蓋、そして墓壇の4隅から墨書のある土師器坏4点と数点の鍛冶滓、フイゴ



第1図 白樫野遺跡の位置

の羽口2点が出土した。さらに蔵骨器の内部からは、火葬された人骨が発見され、鑑定の結果、1体分の人骨が納められていた。

墨書土器には、土器にそれぞれの土師器に「山」と一文字が記されていたが、文字の意味するところは不明である。

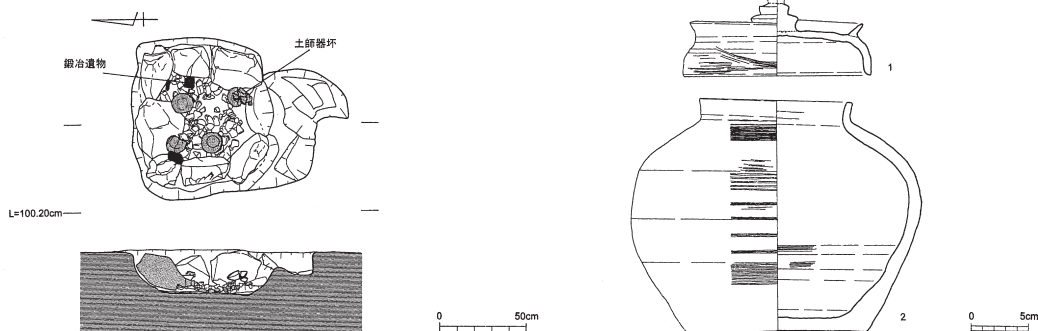
なお、本遺跡の時期は土師器坏の特徴から、8世紀後半から9世紀初頭に位置づけができる。

特徴

蔵骨器は、県内でも多くの資料が出土しているが、本遺跡の特徴をもっとも良く表しているのは、しっかりした構造をもつ墓壇と蔵骨器の蓋、墓壇内の4隅から出土した土師器坏、鍛冶に関連する遺物に出ている。

石組みを伴った墓壇は、方位を意識したうえに敷石を伴うなどしっかりした構造で、九州内でも例が少なく南九州にあっては貴重な資料である。

蔵骨器の蓋は、天井部と体部の境に鏝を貼付し仏舎利塔を意識したようなつまみを有している。仏舎利塔形のつまみについては、国外に目を向ければ統



第2図 火葬墓と蔵骨器

一新羅の蔵骨器に3重のつまみを有するものが知られているが、国内では奈良県で若干例が知られているに過ぎない。形態的には、統一新羅で出土するつまみの影響を大きく受けて作られた蓋と推測され、仏教文化に関心をもった人物が被葬者であった可能性が高いと考えられる。

墓壙内に土師器杯を埋納する例は、国内は勿論のこと県内でも類例が見られる。福岡県大迫遺跡では、墓壙の4隅を強く意識して土師器や石を配置している。県内の吉田町牧遺跡では、蔵骨器を囲むように6組の土師器杯が合せ口となって出土している。これらの事例については、陰陽道関係の祭祀の場で見られる結界の意識が働いていたと推測されており、独特な祭祀行為が行われていたようである。

また、鍛冶に関連する遺物が一緒に出土したことは、埋葬された被葬者像の性格を知るうえで重要で

あり注目すべき点である。

南九州にあって、仏教文化をはじめとする中央とパイプがあった被葬者が埋葬されていた可能性が高く、律令期の南九州支配の様相を知るうえで貴重な遺跡である。

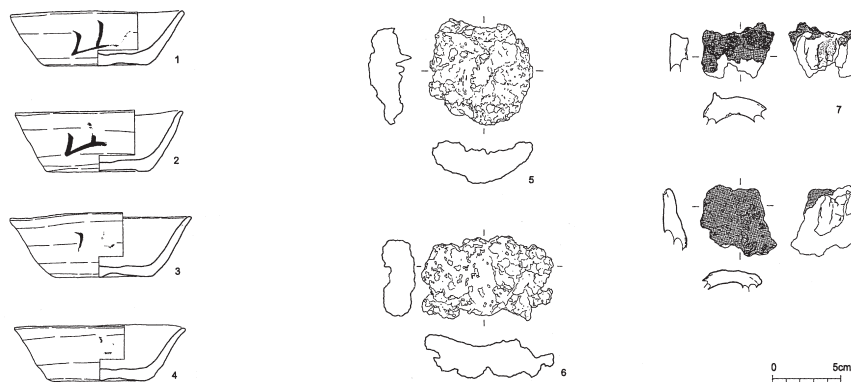
資料の所在

出土遺物は、金峰町文化センターに展示保管されている。

参考文献

宮下貴浩2000「白檜野古代火葬墓と製鉄遺物」『鹿児島考古』第34号

(宮下貴浩)



第3図 出土遺物



写真1 白檜野火葬墓